

【事例紹介】

地方短期大学のダブルディグリー・プログラム

-佐賀女子短期大学の韓国留学の在り方-

Double Degree Programs Operated by a Local Junior College:
Korea Studying Abroad for Saga women's junior College

佐賀女子短期大学現代韓国文化研究センター長 長澤 雅春

NAGASAWA Masaharu

(Korean Culture Research Center, Saga women's junior College)

キーワード：ダブルディグリー、韓国留学、海外の大学との交流

内容：はじめに

1. 地方短期大学の現状
2. 佐賀県の韓国熱
3. 韓国の大学との新たな交流型
4. 情の国、韓国に学んだ学生間交流の在り方
5. 蔚山科学大学との交流のきっかけ
6. 短期大学として初めてのダブルディグリー・プログラム(たった一人の入学者)
7. 増える韓国語学習者と支援体制
8. 私立大学研究ブランディング事業の採択と現代韓国文化研究センターの設置
おわりに(専門職資格と韓国留学)

はじめに

人口 160 万人に近い商都福岡市を有する福岡県に近接して有明海に臨む人口わずかに 23 万人の佐賀市。その中央に位置する佐賀女子短期大学は、小さな女子短期大学ではありつつも、地域に生まれ長年にわたって英語の語学研修にイギリスやニュージーランドへと少なくない数の学生たちを派遣してきた。

それが、1990 年代の後半を過ぎてからいわゆる「失われた 20 年」時代に突入すると、急速に英語熱が冷めたかのように、当時の「文学科」やそれを改組した「文化コミュニケーション学科」、そして

さらなる改組「キャリアデザイン学科」への英語学習者の入学が減少してきたのである。他学科でも定員の削減が相次いで、それまで英語圏との国際交流を特色として謳ってきた本学だったが、「国際交流」は徐々に漂流を始めるようになった。

本稿は、そうした地方の短期大学が佐賀県の特色を生かして韓国の協定大学との交流を深め、さまざまな教育プログラムを韓国協定大学と共に開発してきたことを報告するものである。

1. 地方短期大学の現状

18歳人口の大幅な減少に伴う大学全入時代を迎えて久しいが、地方短期大学においては全入どころか定員割れが常態化するという困難な時代に突入している。そうした困難な時代のなか、地方短期大学は保育士や栄養士、介護福祉士などといった専門職人材の育成に使命と力点を置き、余力があれば語学やビジネスなどの人文系学科やコースを併置して卒業生を地元企業へ送り出すことに専念してきた。

私の勤める佐賀女子短期大学もまた、地方に点在するそうした短期大学の典型的な使命を担ったありふれた教育機関である。そしてこの困難な時代を迎えて、2016年度にそれまでの3学科を「こども未来学科」（こども保育コース、こども教育コース）と「地域みらい学科」（食とヘルスマネジメントコース、福祉とソーシャルケアコース、健康とホスピタリティコース、グローバル共生コース）という2学科6コースに改組した。

とはいえ、この改組によってこの困難な時代に十全に立ち向かえとは到底思えない。受験生の4大志向と専門学校人気の狭間で長く低迷する短期大学は、学長の忍耐強いリーダーシップがなければ、改革への手詰まり感によって改革への意識が萎えやすいからである。

職業教育を専らとする短期大学の教育理念や使命には、「地域貢献」というわかりやすい冠が伴う。そしてこの「地域」にどのような人材を育成して輩出していくのか。しかしそれは果たして「地域」が本当に望む人材であるのか。そのような思考の逡巡の果てから出てくるのが、当たり前のことだが、その大学に特有な「特色」の有無である。いかにいえば、どのようなブランドをその短期大学が有しているか、ということに尽きる。

先にも述べたが、本学は「国際交流」を特色としてはいたが、残念ながらそれは近隣の大学を凌ぐほどのブランドと呼べるものではなかったし、本学入学者の英語熱が下火となる中で、国際交流のプログラムは高額な欧米圏への語学留学だけが目立ち、斜陽となっていった。

2. 佐賀県の韓国熱

ところで、佐賀県は歴史的に韓国との縁がきわめて深い。たとえば、吉野ヶ里遺跡から発掘される出土品からは朝鮮ルーツが語られ、その吉野ヶ里遺跡の近くには、『日本書紀』巻第十（応神紀）に百

済から日本に渡来して『千字文』と『論語』を伝えたと言われる王仁博士の鰐神社¹がある。

また『日本書紀』によれば、百済の第25代の武寧王の誕生の地が唐津市加唐島にあり、豊臣秀吉によるいわゆる「文禄・慶長の役」(韓国:壬辰倭乱)も唐津市鎮西町にある名護屋城を根城に全国から大名が集結して出兵したものである。

現在その地には佐賀県立名護屋城博物館²があって、韓国との交流に特化した拠点として朝鮮半島の古代から近代に至るまでの交流史常設展や特別展、韓国語スピーチコンテストなどを開催している。そして周辺の道路標識には設立当初から漢字とともにハングル文字が併記されているのだ。

さらに有田焼の祖として知られる李三平は、その時日本に渡った朝鮮陶工の一人であり、有田町では李三平を陶祖とする陶山神社が親しまれ、5月の連休に開催される有田陶器市には延べ100万人ほどの観光客が全国から訪れてこの陶山神社にも参拝している。

このように、佐賀県には百済時代から朝鮮時代へと続く日本との歴史的因縁が少なくなく、さらには、佐賀市内から間近い九州国際佐賀空港には韓国のLCC航空会社であるティーウェイ航空が安価な航空運賃で仁川～佐賀間を毎日就航させているため、佐賀と韓国の往来がきわめて気軽に快適なものとなっている。

地方空港としてはもっとも成功している空港例として常に名を挙げられる九州国際佐賀空港は、久留米市や大川市柳川市など福岡県南部の地方都市からの利用客を包含しながら仁川空港へさらに増便されている。佐賀県にとって韓国はたんに日本の隣国であるというだけでなく、歴史的因縁とともに日常生活に馴染んだ隣国となっているのだ。

ちなみに本学は2016年、ティーウェイ航空との間で産学連携覚書を結び、佐賀県知事がそれをプレスリリースした。オープンキャンパスでのティーウェイ航空グッズの提供や本学主催の韓国語スピーチコンテストの副賞提供と審査員、学生の空港見学体験、佐賀県空港課と共に行うティーウェイ航空一日空港マネージャーイベントなど、今後はさらに学生のインターンシップの受入れもお願いしている。ティーウェイ航空が大学との産学連携を結んでいるのは本学のみだと聞いているが、福岡支店と佐賀支店と連携しながらさまざまな協力を得ていることも報告しておきたい。

3. 韓国の大学との新たな交流型

私が本学に赴任したのは1998年4月のこと。3月までは韓国の仁済大学校外国語教育院(慶尚南道金海市)に3年間勤務していた。当時はまだ日本のバブル景気の余韻が残っていて、韓国の大学や日本語学校に勤める日本人は少なくなかった。

¹ 鰐神社の鳥居は元禄12年(1696)に寄進されたものだと記録され、また2018年8月には新たに王仁博士顕彰公園が設立された。

² 設立は1993年10月30日

それが1997年12月に突如として韓国にも起こった国際金融危機(通称IMF)によって、韓国を離れることを余儀なくされた外国人は日本人も含めて相当数にのぼった。そのため、日本語教師として韓国滞在を経験した人々は、帰国の後に日本の大学に就職するとそれまで在職していた韓国の大学や研究仲間の勤務する大学との協定になんらかの仲介役を担うことになった³。

とくに豊富な人材を持たない地方の短大では、国際交流といえば仲介業者を介した欧米への語学研修派遣が主流であるわけだが、韓国や台湾・中国など東アジアでの日本語教師経験をもつ人材たちの帰国が相次ぐと、派遣するだけで汗をかくことのない従来型の国際交流ではなく、両大学が互いに汗をかく、相互受入れという実質的な交流の形態へと変わっていったのである。入学者の長期にわたる減少は、汗をかく国際交流へと実態が変化していかざるを得ない現実に直面していったといえる。18歳人口の減少と大学における国際交流の在り方の変化には、少なからず相関関係が成立するものだと私は考えている。

ところで、日本が「失われた20年」と言われるバブル後の長い低迷期に苦しんでいる間、韓国・中国・台湾は飛躍的に経済力が伸長して、現在ではかつてのような経済格差は見られなくなった。そのため、大学間交流は派遣と受入れの両輪がスムーズに回転するようになったのだ。

本学も、私が赴任した当時はイギリスやニュージーランドへの文化研修や語学研修への派遣が定番だったが、徐々にそれを希望する学生が減少し、英語を学ぼうと入学してくる学生すら減少した。長引いた不況と「本当に英語を習得するなら短大ではなく4大で」という風潮があるのかもかもしれない。

その英語に代わったのが、2004年「冬ソナ」ブームを境に突如として登場した韓流ブームである。正確に言えば、『冬のソナタ』などの韓流ドラマをお母さんやおばあちゃんの側で一緒になって見ていた女の子たちが成長した2010年頃以降になるのだろうが、本学では入学してくる英語志向の学生の数と強い韓国語熱を持つ学生の数とが逆転した。

4. 情の国、韓国に学んだ学生間交流の在り方

私が本学に赴任した翌年の1999年、友人でもある慶州大学外国語学部日語科の教員から、2週間の語学研修プログラムを作ってほしいといって20名の学生を送り込んできた。まもなく2000年を迎える年のことだったが、これが、本学が海外から語学研修として受け入れる初めての大学間交流だった。その翌年は30名に増員され、本学からも夏季韓国文化研修として2週間のプログラムを相手校に作ってもらい、毎年10数名を派遣した。これが何年も続いた。

現在のような韓流ブームがあるわけでもなかったのだが、韓国への関心を示していた学生は少な

³ もちろん、仲介する人の個性によるところが大きいですが、私の周囲では韓国滞在中における恩返しという意味でも、なんらかしらの形で韓国との交流に携わった人たちが少なくない。

らずいて、また日本語を使いたくてうずうずしている韓国の日語学科の学生たちは、本学の学生が宿泊するホテルの一室を2週間の研修期間中を借り、多くの学生たちが入れ替わりして朝から晩までを本学の学生たちとつきっきりになって交流を楽しんだ。

この慶州大学との長い交流は、私だけでなく本学の受入れ態勢に大きく寄与してくれた。慶州大学の担当教員が行ってくれる文化研修プログラムは、受け入れる学生の自主性を中心に組まれたもので、大学や教員はそれを背後で支援するというものだったからだ。それと同じ事を短期大学、それも女子だけの本学がやれるかといえばとうてい不可能に思えた。しかし、韓国でそれを経験した多くの学生はそれを恩と感じ、だから恩返しをしなければならないと帰国後も感じているのが強く感じられた。同じこと、つまり同レベルの「もてなし」ができなくとも、それに感謝を覚え、どう返せばいいかに悩むのは、手作りによる研修プログラムのなせる業だと思う。

いま、本学の海外協定大学からの語学研修などの受け入れ方は、私が慶州大学の旧き友人に学んだ「もてなす」という思想を踏襲したものである。当たり前なことだが、受入れ研修生の毎日の安全を受け入れる大学側が準備し、学生間では交流の喜びと感動、そして友情が育む自由度をもったプログラムを組むというものである。

そして、本学の受入れの仕方が慶州大学の学生たちにも認知されるようになって、卒業と同時に本学に入学し、2年を費やして日本での就職や大学院を目指すという留学生が若干名だが毎年入学するようになっていった。だが、友人が過労で病気を患うとこちらにも遠慮が生じて相互派遣の交流はしばらく行わないことにした。

大学間交流の大きな問題は、担当者になにかあれば中断してしまうことである。そうならないようにするには組織的な運営の見直しが必要であり、国際交流センターなどの組織運営の在り方は、じつは大学にとってたいへん重要なポイントである。

5. 蔚山科学大学との交流のきっかけ

2008年、人口100万人の蔚山広域市にある蔚山科学大学から本学と協定を結んで交流をしたいという打診のメールが本学国際交流アドレスに届いた。それまで韓国とは一つの大学しか交流の経験がなかったため、またその年の慶州大学への派遣が難しくなったため、その申し出を喜んだ。

蔚山科学大学は、韓国の現代グループが設立した大学で、文系2年課程から理系4年課程までである学生数5,000人規模の大学である。本学の500人に満たない定員数に比して、学科構成や教職員数、キャンパスなどあらゆる面で雲泥の差がある。その4年制大学として蔚山大学がある。

蔚山科学大学で日本との国際交流を開拓して、実務外国語学科にも所属している教員が、協定書の作成のために初めて佐賀、そして本学を訪れた。互いに大学の国際交流を担当するものだが、もちろん顔も知らない。しかし、初対面であったにもかかわらず夜を徹しての両大学が納得できる協定書の

作成作業を通して、彼の国際交流への情熱と夢を学んだ。

そして私たちは基本となる「学術協定書」と「交換留学細部協定書」を作成して翌日の調印式に臨んだ。本学の当時高島忠平学長が署名し、それを携えて蔚山科学大学の教員はその日に帰国し、しばらくして蔚山科学大学総長の署名した協定書を郵送してきた。その後、両大学の学長と総長がそれぞれの大学を表敬訪問して実質的な交流が始まった。

後に直接本人から聞いたところによると、北海道から九州までの短期大学を対象に協定を打診するメールを送り続けたという。なぜ短期大学なのかというと、「短期大学どうしだからこそできるプログラムを作りたいから」ということだった。だが日本から来る回答はきまって「留学生をどれくらい送ってくるのか」というものばかりだったという。

そういうなかで、私からの「学生間交流を充実できますか」「佐賀から交換留学生としてそちらに送ることはできますか」「交流のため互いに汗を流せる関係を築けますか」「経営重視の交流ならばできませんが」「本学は地方の本当に小さな短期大学で、訪れたらきつとがっかりします」「ですが、交流が決まればおそらく他の大学とは違ったものになるでしょう」という返信が来たのは本学だけだったという。

そして蔚山科学大学の彼からきた返信には、「教育には大学の広さや大きさは関係ありません。教員の、学生を育てるといふ情熱や愛情がどれほどあるかということではないでしょうか。むしろ小規模な短期大学だからこそ、学生が満足する教育ができるものだと私は思っています」と流暢な日本語で書かれてあった。

6. 短期大学として初めてのダブルディグリー・プログラム(たった一人の入学者)

その年の夏の「1週間韓国文化研修」には本学から20名以上の学生を派遣した。韓流ブームもあって韓国を体験したい学生が増えてきたのだ。学生には研修費があまり負担にならないよう、全員に渡航費以上の支援を行ったことと、また蔚山科学大学の研修費が安かったため、学生の研修参加費は渡航費・食費・宿泊費・観光体験費などをすべて含んで当初は2万円の研修費として説明会を開いたが、学生たちはその安さに疑念を抱いてなのか集まらなかった。そのため急遽3万円に値上げしたところ説明会に来る学生が増えたのはいまでも記憶されるできごとだった。

蔚山科学大学の受入れは、慶州大学と同様たいへん丁寧できめ細やかなものだった。パディーというパートナーとなる学生を多数配置して本学の学生たちが困らないようにと、入国から帰国までの1週間を24時間態勢で支えてくれた。日本語のできる学生もいればさっぱりわからない学生もいる。本学の学生たちも挨拶以外の韓国語は理解できないながらも、日ごろ教員に見せたことのないような大きな喜びの表情を見せ、韓国での充実した1週間を懸命に楽しんだ。

そして翌年の新年度からは交換留学生を双方向的に派遣し合うことにした。派遣先は実務外国語学

科日語コースだったため、外国語としての日本語を学ぶだけでなく、韓国語と日本語の相互訳や相互通訳を学んだ。また、ちょっとしたことでも学生の近況については常に連絡を取り合う態勢にしていたため、双方の信頼関係が深まっていった。

そういうなかで、蔚山科学大学側から本学と海外複数学位制度をやりたい、という申し出があった。韓国の短期大学ではまだこれを行っている大学はないが、教育部からは了承を得てすでに規程も作ったという。当時の日本では大学院レベルで少しは行われているものなのだろうが、まだ「ジョイントディグリー」「デュアルディグリー」「ダブルディグリー」などと呼称すら定まっていなかった。文科省がガイドラインを出して混乱した名称と概念を整理し始めた2010年頃のことだ。

私は蔚山科学大学側からの申し出を受けて、日本の短期大学でも海外との協定によってそれが可能なかどうかを模索しなければならなかった。くわえて、なぜ本学の学生にそれが必要なのか、それをするためには学内で何をしなければならぬのか、文部科学省はそれを認めるのだろうかなど、様々な問題を想定し一つ一つに答えを求めていった。

まずは文部科学省のHPトップ画面にある電話番号に研究室から電話して、関係部署、担当係へと繋いでもらった。担当の係官は最初驚いて「さあ、短期大学のダブルディグリーは聞いたことがありませんが」ということだったが、佐賀県の韓国との歴史的な因縁から根付いた交流の深さ、しかし佐賀県には韓国文化・韓国語を学ぶ高等教育機関がないこと、その役割を今後本学が担い、韓国の協定校と留学を軸にした双方向的なプログラムを開発していきたいこと、その主要なプログラムがダブルディグリー・プログラムであることなど、本学の国際交流の理念などを交えて説明した。

私の長い話が終わると担当の方から「承知しました、文部科学省としては支援していきますので頑張ってください」との支持を得ることができた。

次は学内の規程作成であり、さらに蔚山科学大学の卒業要件と本学の卒業要件や履修時間などを付け合わせて、可能かどうかを検証していった。学長や教務部長、規程検討委員長、学科長などさまざまな関係部署の長の協力を得て、規程や内規作成はスムーズにいった。

だが、韓国の大学を卒業するためには、相当な韓国語能力がなくてはならず、しかも高校では英語のように韓国語の科目を設置しているところはほんのわずかだ。しかも英語ほどの時間数は確保されていない。とするならば韓国語についてはまったくの初学者を受け入れて韓国語教育を行い、2年次に韓国へ送り出すという離れ業を本学が行うにはどうすればよいか、という壁に突き当たった。

それに、韓国語の科目を多数設置しても果たして韓国語を熱心に学びたい高校生がいるのだろうか。入学者がいなかったらどうすればいいだろうか。いざ走り始めると多くの不安ばかりがよぎるばかりだったが、当時のキャリアデザイン学科内の1年次科目に、専門科目となるような韓国語を前期後期合わせてまずは6科目を設置することを決めた。

そして2012年12月18日、ダブルディグリー・プログラム協定⁴の調印式を本学で行い、13の報道機関の取材のもと、両大学の総長と学長が署名した。大学案内の掲載には間に合わなかったが、テレビ報道を見てこのプログラムを知ったという福岡県の受験生1名から問い合わせがあり、翌年4月からこの1名を受け入れることにした。この学生は本学入学時点ですでに韓国語能力試験でいえば3級に近い力を有しており、福岡の4大も含めて検討した結果、本学への入学を決めたということだった。

初年度はこのたった1名の学生の韓国語能力を伸ばすため、そして次年度以降を改良するため、この学生とともに今後必要となる科目や授業内容を模索した。その翌年の2月下旬、この1名の学生を蔚山科学大学実務外国語学科に送り、相手大学からも日本語が堪能な1名の留学生在が派遣されてきた。ダブルディグリー元年の本学学生は、卒業までに韓国語能力試験では上級にあたる5級に合格して、福岡の韓国語を必要とする会社に就職し、韓国からの留学生在は博多駅にある百貨店のインフォメーションで素敵な制服を着て勤務することになった。

7. 増える韓国語学習者と支援体制

本学の韓国語ダブルディグリー・プログラムは徐々にだが見られるようになり、これを目指して本学を志望する高校生が他県からも増え、2018年のオープンキャンパスには本州からの参加も目立ってきた。蔚山科学大学での夏季韓国研修の参加者も4週間、2週間、1週間とプログラムも増えて本学からの参加者も30名を超えるようになった。

また、2017年は金浦大学とも新たに協定を結んで、本学が受け入れる4週間日本語研修は年2回を行うまでになった。本学の学生たちは韓国からの語学研修生を受け入れることを楽しみにしており、自分の韓国語能力の確認のための交流ともなっていた。

さらに2017年には江原道にある翰林大学の短期大学部である翰林聖心大学との間でもダブルディグリー協定を結ぶことになった。2018年度翰林聖心大学とはそれぞれ3名のダブルディグリー生を交換し、蔚山科学大学にも3名が学位取得のため留学中である。

もちろん、全員がこの制度を使って留学できる仕組みではない。まずは1年次に韓国語能力試験(TOPIK)2級以上に合格すること。2年目には必ず3級以上に合格していなければならない。ハードルとしては決して高いものではないが、ハードルを置くことによって自身のなかで競争があること、学習する者には自分の手が届く範囲のところにありという安心感も兼ね備えた。

このプログラムは現在、3年前に改組した「地域みらい学科」にある「グローバル共生コース」(定員40名)内で行われており、このコースには韓国留学を主とする韓国語分野のほかに、図書館司書、英語分野がある。このプログラムで韓国留学を目指して入学してくる学生は毎年15名を越えるまでな

⁴ 相互の受入れを原則とし、相互派遣数に偏りが生じた場合は、その分の授業料は超過した大学が負担することにしてある。

ったが、そのうち交換留学も含めて希望者は全員が韓国留学を果たしている。下記が現在設置している韓国語科目の一覧である。

1年		2年	
前期	後期	前期	後期
韓国語(通年)		中級韓国語 I	中級韓国語 II
韓国語(読む) I ※	韓国語(読む) II	ビジネス韓国語 I	ビジネス韓国語 II
韓国語(書く) I ※	韓国語(書く) II		トラベル韓国語
韓国語(話す) I ※	韓国語(話す) II		
韓国語(聞く) I ※	韓国語(聞く) II		
TOPIK レベルアップ講座 I	TOPIK レベルアップ講座 II		TOPIK2 レベルアップ講座
韓国文化研究 I		韓国文化研究 II	

韓国語の学習希望者が増えてくるにしたがい、韓国語を中心に勉強したいけど就職に力点を置きたいので留学はしない、などなんらかの事情で留学をせず2年次も本学で韓国語を学びたいという学生が一定数存在するようになった。また、英語分野・司書分野の学生も1年次に韓国を履修し、2年次でも引き続き履修したいと言う学生も出てきた。さらに、交換留学生として前期留学のみを希望する学生も少なくなく、多様な学生の要望に応えるためにも、2年次に韓国語科目を設置することにした。

当初から予想されたように、入学時においてすでに韓国語学習歴のある学生と、まったくの初学者である学生という二類が顕著になってきた。そのため、上表※の科目はグレード別クラス編成を取り入れることにした。初学者クラスは日本語と対比しながら韓国語の基礎を学んで徐々に韓国語の仕組みについて理解を深め、後期からはクラスを統合することにした。統合のためには蔚山科学大学が催す4週間の韓国語セミナーへの参加が重要であるため、これも参加者には渡航費などの支援を行って金銭的な負担を和らげている。私たちは4週間韓国語セミナーを12万円の研修費で参加させている。

入学者が増えるにしたがって韓国の4年大学への編入を希望する学生や、そのまま韓国で就職したいという学生が出てきたため、複数の4大とも大学間協定を結ぶなどして編入のための受験料・入学金・入試の免除、TOPIKの合格級に応じた学費の減免や免除を受けることができた。これによって、4年間のうち3年間を韓国留学することになり、かつ国内の大学4年間分よりはるかに負担のない授業料で韓国の4大を卒業できるという流れを築くことができた。現在、本学の韓国語を学ぶ学生の2年間の学びで獲得する韓国語能力(TOPIK)級は、4級か5級がスタンダードになりつつある。最上級である6級まではもう一息かもしれない。

2017年度卒業生の3年次編入大学は蔚山大学と慶南大学だが、2018年度卒業生は、さらに培材大学・翰林大学への進学希望を申し出ている。現在、本学卒業生の編入先となる韓国の大学は次のとお

りである。

- ・蔚山大学(蔚山広域市)
- ・培材大学(大田広域市)
- ・慶南大学(慶尚南道昌原市)
- ・翰林大学(江原道春川市)
- ・釜山外国語大学(釜山広域市)

今後もさらに編入先大学を拡大させていく予定である。

8. 私立大学研究ブランディング事業と現代韓国文化研究センターの設置

本学は、学長の強いリーダーシップのもと、「平成29年度文部科学省私立大学研究ブランディング事業」に申請書類を作成し応募した。申請内容は、本学が行っている韓国語ダブルディグリー・プログラムの質を保证するための、本学独自の短期大学生用韓国語教材の作成と、北部九州における韓国交流の拠点となるような交流プログラムの開発を担う機関としての現代韓国文化研究センターの設置である。この事業計画は採択され、韓国と日本の大学で日本語・韓国語教育歴のある専任研究員と、韓国語の技能に優れた専任職員を新規に採用した。そして短期大学としては初めてとなる韓国研究センターを発足させた。

私たちはさっそく付属高校内にあるイベントホールを使用して5月27日、「第一回 中高校生のための楽しい韓国語スピーチ大会」を開催し、産学連携するティーウェイ航空や西日本旅行、協定校である培材大学・蔚山科学大学からそれぞれ豪華な副賞の提供を受けた。佐賀県内はもとより、長崎県・福岡県から37名の中高校生参加者があり、スキット部門とスピーチ部門ともにきわめてレベルの高いコンテストとなった。韓国語を独学で学んでいる生徒たちは、自分の学習成果を表現する場を求めているのだと、このときあらためて思った。そういう生徒たちが本学に学んで将来へのステップを踏んでほしいと願った。このスピーチコンテスト開催の成功とアンケート内容を読んで、本学の韓国語教育プログラムを北部九州のコアな高校生の中に広めることができたのではないかと自負している。

おわりに(専門職資格と韓国留学)

地方の短期大学の使命は地域への専門職人材の輩出である。たとえば本学でいえば保育士や幼稚園教諭、介護福祉士、栄養士などがそれである。だがこれらの専門職資格は実習や2年間の在籍における必修科目の履修など、きわめて忙しい2年間を過ごすことになる。それでも韓国へ留学したい、という学生が少なからず存在して本学に入学してくる。だが結果的には資格を得て卒業するためには留学を断念するしかなく、1週間から4週間の夏季韓国研修に参加するしかない。

ただし、考え方によってはなにも2年間で卒業しなければならないという制約はない。留学体験は

未知なる自己を発見する場であり、自分を変えたいと思っている学生にとってはこれまでの自分と決別するきっかけとなるものでもある。現代韓国文化研究センターは全学的な取り組みとして、学生の留学への夢を現実とするため、従来から設置してあるものの未だ利用されることのない「長期履修制度」を利用して、専門職資格分野の学生でも卒業を1年遅らせることで、交換留学やダブルディグリー・プログラム留学ができるようにした。これには受け入れ大学の協力が不可欠だが、快く応じてくれて2019年度入学生から適用できるよう準備を進めている。

以上、長い報告文になったが、人口の減少と若者の流出によって低迷する地方の短期大学である本学が、韓国の大学との交流を通じてユニークな短期大学へと変貌していく様子を概略してみた。この間、私たちは留学生の相互派遣だけにとどまらず、蔚山科学大学とはこれまで2度の国際シンポジウムを交互に行い、翰林聖心大学とは「地域みらい学Ⅰ」の交流授業を行ったりしてきた。じつは、学生たちの切なる要望こそが、大学の常識を超えてその在り方を大きく変えていくのだと、学生たちにつくづく教えられている。